紹介

明石書店/2019年12月/
A5判/266頁/
定価 3,500円＋税

**スー・マケミッシュ、マイケル・ピゴット、
バーバラ・リード、フランク・アップウォード 編、
安藤正人、石原一則、坂口貴弘、塚田治郎、
保坂裕興、森本祥子 訳**

『アーカイブズ論
―記録のちからと現代社会―』

**Sue McKemmish, Michael Piggott, Barbara Reed, Frank Upward eds,
Masahito Ando, Kazunori Ishihara, Takahiro Sakaguchi, Jiro Tsukada,
Hirooki Hosaka, Sachiko Morimoto, trans.
“Akaibuzu ron: kiroku no chikara to gendai shakai”**

金 河恩
Kim Haeun

はじめに

本書は、2005年に刊行されたSue Mckemmish, Michael Piggott, Barbara Reed, Frank Upward eds, *Archives : Recordkeeping in Society*（『アーカイブズ：社会におけるレコードキーピング』）の翻訳書である。原著は全12章から成るが、その半分にあたる６章（第１、２、３、９、10、11章）が本書に収録されている。「レコードキーピング」という新たな概念や「レコード・コンティニュアム」（Records Continuum）という理論モデルを用いて、ライフサイクル論をはじめとする従来のアーカイブズ学の枠組みを再考することを目的に、当代きってのアーキビストらにより執筆された原著は、二つの概念が形成された国であるオーストラリアだけでなく、広く国際的にも注目を集め、今日に至るまで各国のアーカイブズ界に大きな影響を与えてきた。この点において、本書は日本でも翻訳・出版が待たれる一冊であったということができよう。

文化、組織、歴史、集団的・個人的、そして社会的・法的な文脈を踏まえつつ、レコードキーピングとアーカイブズについて論じた本書では、記録が持つ「ちから」とその役割が人々の生活や活動に影響を与えることと、人々の記憶が記録に影響を与えることとの相互関係が考察されている。また、「今日、レコードキーピングは、人間のあらゆる努力を支える知的基盤となっている」（107頁）とあるとおり、記録が時空を超えて、過去・現在・未来の文化を共有する役割を担っていることを論じる。このような本書の内容は、加速化するデジタル社会において、人間の活動やコミュニティ文化を保存することに関して示唆

を与えるものである。アーカイブズに関わっている人はもとより、他の分野に属している人々にも記録のちからについて考察できる点があると思われる。

以下では、本訳書の内容を各章ごとに要約し、その紹介に努めるとともに、本書が出版されたことの意義について、評者なりの所感を述べたい。

本書の内容

第１章「痕跡」（スー・マケミッシュ執筆）では、証拠や記憶としての「痕跡（トレース）」が論じられる。「もの語りする動物」という言葉で表された人間が残す痕跡は、「記憶でありアーカイブであると同時に、無事に残しえたはずのものを除去し、抑制し、忘却した証拠ともなる」（33頁）として、あらゆる出来事の証拠や記録になりうるものであることが示される。その事例として、オーストラリアで起こった「子供海中投げ込み」事件を分析する。2001年10月６日から８日にかけて起きた「子供海中投げ込み」事件の核心となるドキュメントは写真であり、これがアーカイバルな痕跡になった。詳細については本書をお読みいただきたいが、難民の子供を海に投げ込んだという話（デマ）が複製写真とともに拡散したこの事案は、記録（レコード）の証拠、痕跡としての質の保持において、「レコードキーピング」の果たす役割がいかに大きいものであるかを示している。このように、記録は「つねにレコードになり続けている」という点で「動的なもの」（53頁）とみなされ、そうした記録の信頼性と真正性を担保するために、「レコードキーピング専門職の役割は、レコードとアーカイブズの生成過程に関わるという、より能動的なものになってきている」（62頁）として、専門職が向かうべき方向性を提示する。

第２章「アーカイブズ機関」（エイドリアン・カニンガム執筆）では、アーカイブズ機関が実際にはどれほど変わりやすい創造物であるかについて焦点を当て、太古からフランス革命、20世紀を経て現代に至るまで、旧植民地社会、北アメリカ、オーストラリアなどの地域における多様なアーカイブズ機関の発現や役割について概観し、比較分析を行う。そして、「それらが存在する時間と空間に依存して産物であるということだけでなく、時間と空間の積極的な構築者であることを説明」（66頁）する。これに基づいて、それぞれのアーカイブズ機関の使命と役割を考察している。また、政治的・文化的環境のもとに存在しているアーカイブズ機関の「形式や使命を規定する普遍的な法則がないこと」（66頁）が確認される。こうした考察を通じて、アーキビストは、アーカイブズがより民主的な役割を果たすことのできるよう、環境の変化を巧みに利用できるようにするべきと述べられる。

第３章「アーカイブズを職とすること」（アン・E・ペダーソン執筆）では、「レコードキーピングのシステムやサービス制度の設計や運用に、職業として関わる人に焦点を当て」（108頁）、レコードキーピングを支える理想的な社会の構成要素について論述する。「蓄積した人類の記録は、世界のすべての文化遺産のうちで最も失われやすく、しかし最も重要なものである」（138頁）ことから、今日のレコードを明日のアーカイブズとして生き残るよう

にするため、専門職には新たな戦略的使命が求められているとする。また、本章では、専門知識と教育の見直しを含め、レコードキーピング専門職のキャリアの方向性についても考察が行われている。

第４章では、「レコードキーピングとアカウンタビリティ」（クリス・ハーリー執筆）について論じている。アカウンタビリティに関係するレコードキーピングの役割と機能を分析し、それらを実践する専門職が果たす役割について検討する。本章では、アカウンタビリティの行為主体としてのレコードキーパーの役割は何かという問いについて、準立法者、指導教官、助言者、共同当事者としての支援者、支援隊、ツールやインフラの提供者、モニター、監視機関、執行者、監査官という10の役割が挙げられる。その上で、本章では、自治と独立がアカウンタビリティの行為主体としての役割を支えるものではあるが、「レコードキーパー制度の外部に行動の標準ができて、その標準に照らしてレコードキーパー個々の行為が合理的で適切であったのか、あるいはそうではなかったのかをいえるようになるまで、レコードキーパーに自治と独立が与えられるべきではない」（177頁）と強調し、今後も考慮し続ける必要のある課題としている。

第５章「レコードキーピングと法的ガバナンス」（リヴィア・イアコヴィーノ執筆）では、レコードキーピングと法・倫理の関係をガバナンスの側面から論じている。「記録は、社会の結束を助ける社会的メカニズムとしてのガバナンスにおいて、中心的な役割」を担い（189頁）、コミュニティの中で個人や集団のふるまいを制御する方法としての「自治（セルフガバメント）」の役割を果たしている。そのことを踏まえ、本章では、レコードキーピングは法的、社会的関係のガバナンスにおいて不可欠な部分を形成し、社会法学システム内での法的及び倫理的権利ならびに義務を支え、ビジネスと社会的活動を規制するために必要とされ、ある特定の活動の証拠あるいは証明であり続け、そして、倫理的法的システムを支える個人、組織、そして民主主義におけるアカウンタビリティに貢献する（190頁）ものであると示す。現代のアーカイブズとレコードキーピングは、ある一つの社会だけのものではなく、グローバル・ネットワークを含むさまざまなコミュニティに属する場合もある。それらのコミュニティは共通の利益をもち、集合的利益によって動いていく。記録の法的ガバナンスは、このようなコミュニティの中で、記録の信頼性と真正性を確かなものとし、個人、集団、集合的アイデンティティに寄与すると述べられる。

第６章「レコードキーピングと社会的なちから」（エリック・ケテラール執筆）では、集団的記憶と個人的記憶が反映された様々な痕跡について探求し、レコードキーピングが個人、そして社会に与えるちからについて考察している。レコードキーピングの役割を明確に示している「権力（Power）」と「ちから（power）」に焦点を当て、アボリジニ、ナチス、ソビエト連邦国家保安委員会（KGB）等の事例に言及しながら、記録が圧政や支配の手段にもなれば、人々に権利を付与し、解放や救済の道具にもなりうる、言い換えれば記録そのものが「ちから」であることを指摘している。

所感

本書では、全体を通じて「記録はちからを持っている」ことが語られている。さまざまな観点から「記録のちから」を確認し、読み手が自ら記録について考察するきっかけを提示している。

本書は決して読みやすい本ではない。記録に関わる専門職にとっても、「レコードキーピング」と「レコード・コンティニュアム」をめぐる議論は決して簡単なものではないだろう。それでも評者は、本書が記録に直接関係しない職業に就く人々にとっても読む意義があるものと考えた。さまざまな分野でデジタル化が進んでいる近年の動向の中で、本書で示されたテーマとは、広く社会や人々にとって有益なものになると感じたからである。その理由とは、本書でも論じられているように、「われわれは誰もがこのレコードキーピングに参加しているのであり、事実上のレコードキーパーなのである」（108頁）からである。激動する社会情勢の中、世界の環境と勢力は変化し続けている。記録を残し、保存するレコードキーパー、すなわち我々は、その変化に敏感に反応しなければならない。過去・現代・未来にかけて、記録の価値基準や評価軸は変化し、これからも変化して行くはずだが、その中で記録が持つ意味と使命、そして「ちから」は変わらないものであるだろう。この点において本書は、レコードキーピングに関わる狭義のコミュニティを超えて、広くレコードキーピングに参加しているあらゆる人々にとって価値ある書になると考える。